

市立公園内の遊歩道にさしかかったころには、律は周也から二歩以上も離れた後ろを歩いていった。周也がそっと後ろをふり返ると、律はおっとりとして一歩一歩をきざんている。律のよゆうのある態度、落ち着いた様子を、周也は

「一方では、前を歩く周也との差が

ように感じられていた。律は「もうだめだ、周也には追いつけない。」  
と思いつつ天をあおいだ。信じられないことが起こったのはその時だった。

空は晴れているのに、大つぶの雨が辺り一面をぬらし始めたのだ。  
天気雨——律にはそれが、

周也にはそれが、

「ひんひん。」  
と言いながら周也がとび上がる。

「何いね。」  
と律の声が続いた。二人してあわてふためく様子がおかしくて、雨

が上がるなり、大笑はいした。その後だった。

「あ、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。ほんとに両方、好きなんだ。」

律がしんけんな表情で言った。そう言った律は、

その言葉を聞いて、周也は「たしかに、そうだ。」と思った。そして、

だまってうなずいたのだ。それを見て、律はわかってもらえた気がして、周也と同じようにうなずき返した。

「行こっか。」

と、

「うん。」

と、

律と周也は肩を並べて歩き出した。歩きながら律は、

歩きながら周也は、